**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第８０回　（２０２１年１０月３日）**

**・勉強範囲：「第四章　在家の人への助言」４３頁**

**～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～**

**📖４３頁上段 3行目**

**師は寺院内の自室で、ケダールおよび他の信者たちと話をしておられた。ケダールは政府の役人であって、数年間を東ベンガルのダッカで過ごし、そこでヴィジョイ・ゴースワーミーと友だちになったのである。二人はいつもいっしょにシュリー・ラーマクリシュナと彼の霊的経験のことを語り合っていた。ケダールはかつて、ブラーフモー・サマージの会員であった。彼はバクティの道を歩んでいた。霊的な話をするといつも目に涙を浮かべた。**

**午後五時だった。ケダールはその日、シュリー・ラーマクリシュナのために祭礼を催して、非常にうれしそうだった。ラームが一人の歌手を雇い、終日が喜びの中に過ぎた。**

**（解説）**

原著（ベンガル語）では、この文章の後に「歌を聞きながらシュリー・ラーマクリシュナはサマーディの状態に入った」とあります。英語版およびそれを翻訳した日本語版（協会出版）にはありません。

**📖４３頁上段 後ろから３行目**

［編者注：英語版はここで改行となっている］**師は信者たちに、神との霊的交わりの秘密を説明なさった。**

**師「サチダーナンダの自覚と同時に、人はサマーディに入る。そのときに、もろもろの務めは脱落する。かりに私がこのオスタード**［＝音楽の教師］**のことを話しているところに彼が着いたとする。そうすればもう、彼のことを話す必要はないではないか。ハチはいつまでブンブンいって飛びまわるか。花にとまるまでのあいだだ。しかし、サーダカ**［＝霊性の修行に専念する求道者］**が務めを棄てるのはよくない。礼拝、ジャパ**［＝神の御名の反復］**、瞑想、祈り、および巡礼のような務めは行うべきだ。**

**（解説）**

冒頭の「神との霊的交わり」は英語版のCommunion with Godを訳したものですが、それらの訳はともに、原著の内容をはっきり伝えていないように思います。原著では、サマーディについて説明なさったという文章になっています。シュリー・ラーマクリシュナは、サマーディとは何か、サマーディの状態とは何かを信者たちに説明したのです──それが今日のテーマです。

『福音』16頁下段に、Mさんが初めてサマーディに遭遇したときの記述があります。このときシュリー・ラーマクリシュナはナレーンドラ（のちのスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）の賛歌をきいて、「身体が動かない（motionless）」、「瞳が動かない」、「呼吸が止まっている」という特別な状態になりました。それは普通の人にはあり得ないことですから、それを見たMさんはとても驚きました。

その頃Mさんは20代の後半でした。神を信じていたのでヒンドゥ教の教師に学んだり、ブラーフモー・サマージなどの宗教グループとも交わりがありました。そこで多くの信者や僧侶にも会いましたが、しかしサマーディは見たことがありませんでした。「意識を失った状態（senseless）でも催眠術をかけられた状態（hypnotize）でもないらしい」と思っていると、近くの信者が「師はサマーディに入っておられる」と教えてくれたのです。

当時のコルカタ・ベンガルでは、神を愛するバクティ、タントラ派、ヴィシュヌ派は人気があって多くの人に実践されていましたが、パタンジャリのヨーガやヴェーダーンタはそれほどではなく実践もあまりされていませんでした。（タントラ派はドゥルガーやカーリーなど「母なる神」というアイディアを普及させて人気でした。ヴィシュヌ派はガウラーンガ（＝シュリー・チャイタンニャ）が人気でした。ヴェーダーンタは大学ではサンスクリット語文法とともにその聖典が学ばれていましたが、一般的ではありませんでした）

人びとの中には「サマーディは聖典に書いてある」程度の知識がある人はいても、その具体的なことを知る人はほとんどいませんでした。Mさんも同様でした。ですから世俗的な原因ではなく、神の賛歌をきいただけでこの特別な状態に入ることに、非常に驚きました。

**サマーディのしるし**

サンスクリット語の「サマーディ」という言葉は「深く入る」という意味を含んでいます。仏教ではサマーディを「三昧」と言い、その意味は「永遠なるものを集中して考えると至る状態」です。また英語ではトランスと言い、恍惚状態と訳されます──イギリスの詩人ワーズワースは自然を眺めていると時々恍惚の状態になったそうですが、しかしサマーディは、それのもっともっと深い状態です。

世界の宗教の聖典にはサマーディについての説明はほとんどなく、キリスト教の聖者にその経験をした人はいるものの、サマーディ自体について書いた文献はないようです。唯一、インドのウパニシャド聖典にはサマーディの詳しい説明があります。たとえば「どのようにサマーディに入るか」「サマーディの種類」「サマーディの状態」「サマーディから戻ることはできるか」「もし戻れたらどのようなしるしが残るか」などです。

と同時に、聖典にはそう記してあっても、その実例はとても少ないということも事実です。シュリー・クリシュナの歌を聞いてトランス状態に入ったという例はありますが、それはサマーディとは異なります。サマーディと比べれば、トランスはさほど特別ではないのです。

ではサマーディとトランスの違いはどのようにわかるのでしょうか──それは、そこから戻ってきた人の結果でわかります。その人の心を調べればわかります。

まず、トランス状態から戻ってきても、その人の性格はあまり変わっていません。戻った直後は素晴らしい喜びの状態であっても、その人の欲望や執着はなくなっていません。

一方、サマーディは、一回サマーディに入るだけで「鉄が金に変わります」。そのことを英語でtouchstoneと言いますが［編者注：普通の金属を金や銀に変える力があるとされた「賢者の石」のことと思われる］、サマーディはそれほどまでに「性格を完全に変える」特別なものなのです。

『バガヴァッド・ギーター』第２章に悟った人（＝スティタ・プラッギャー）、ジーヴァンムクタのしるしが書いてあります。「執着がない」「欲望がない」「心がつねに安定している（＝サマットヴァム：ギーター2-48）」というものですが、それがサマーディを経験した人のしるしであり、証明なのです。外見的にはなんの変化もありませんが、性格が全く変わってしまいます。もし「私はサマーディに入った」と言っている人がいても、心に欲望や執着があるとしたら、その人はサマーディには入っていなかったのです。

**各聖典でのサマーディの説明**

（１）ヴェーダーンタ聖典

『ヴェーダーンタ・サーラ』にはパンチャ・コーシャ（５つの）の説明がありますが、それらはアートマンを覆うカヴァーのようなもので、それらをすべて取り除くとアートマンを悟ります。それがサマーディです。シュラヴァナ、マナナ、ニディッディヤーサナと実践を進めると、最後がサマーディです。

（２）ヨーガ、タントラ聖典

ヨーガやタントラの実践では、一番下のチャクラで眠るクンダリニーを目覚まして一番上のサハスラーラ・チャクラまで上昇させたら、サマーディです。この詳しいことは『ヨーガ・スートラ』にはありませんが、クンダリニー・ヨーガの本の中にあります。

（３）バクティ聖典

バクティ聖典では「バーヴァ・サマーディ」と「ジャラ・サマーディ」を説明しています。

「バーヴァ・サマーディ」は、たとえばクリシュナの物語をききながら、クリシュナの名前（ジャパ）を聞きながら、クリシュナの賛歌をききながら、座っているときでも、立って踊っているときでもその状態に入る可能性があります。英語では「エクスタシー」と言いますが、それはトランスみたいです。エクスタシー（つまりバーヴァ・サマーディ）の場合も、トランスと同じで、戻ってきた直後はたいへんな喜びの状態ですが、1回や2回入ったぐらいで性格が変わることはありません。

それでも（バーヴァ）サマーディと呼ぶのは、そのとき「集中して神を、永遠を思っているから」です。つまりサマーディにはいろいろなレベル（種類）があるのです。

バーヴァ・サマーディよりも偉大なサマーディが「ジャラ・サマーディ」です。これは「ニルヴィカルパ・サマーディ」、「ニルビージャ・サマーディ」と同じです。

ちなみに、ヴェーダーンタで「ニルヴィカルパ・サマーディ」と言っているものは、パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』では「ニルビージャ・サマーディ」と言われています。ヴェーダーンタで「サヴィカルパ・サマーディ」と言っているものは『ヨーガ・スートラ』では「サビージャ・サマーディ」です。［👉『パタンジャリ・ヨーガの実践　～そのヒントと例～』p204、p187の表］

サヴィカルパ・サマーディ（サビージャ・サマーディ）では、サマーディに入っていても（それはもちろんとても高い状態ではありますが）、「2つの存在がある」という意識は続いています。つまりこのサマーディの状態では、「私」と「私の瞑想の対象」という２者が、まだ消えていないのです。

それが消滅するのがニルヴィカルパ・サマーディ（ニビージャ・サマーディ）です。ですがそれは、「１つになった」と言うことはできません、なぜなら「１」を言えば「２」があり「３」があることになってしまうからです──ですから、「非二元論」（non-dualism）という間接的な表現で言い表すのです。つまり、ニルヴィカルパ・サマーディの絶対的な状態は、「一元論」（monism）という、１があって２があり得る相対的な状態を超越していない表現では不適切だということです。釈迦も「ニルヴァーナ」と言い、「何も説明ができない」と表現しました。

（４）『ラーマクリシュナの福音』での説明

絶対的な超越状態であるサマーディは、本来、言葉では表現できないものです。それでもシュリー・ラーマクリシュナは『福音』の中でさまざまな説明をしてくれています。たとえば「アートマン」について、次のようなイメージを語っています。

──魚をイメージしてください。その魚は「意識の海」で（それは無限に広く、無限に深い海です）自由に喜びをもって泳ぎまわります。その魚が「魂」です。魂が自由と喜びをもって大海を泳いでいる、それがアートマンのイメージです。

それに対し、私たちは喜びがあっても自由がない状態だったり、自由があっても喜びがない状態だったり、喜びと自由が両方なくなったり、ある限定された条件下のもとでだけ自由だったり喜びがあったりします。そうした世俗的［＝一時的］な喜びや自由と、サマーディという魂のレベルの喜びや自由は、全く異なります。

これはシュリー・ラーマクリシュナがのどの癌で苦しんでいたときの話です。「痛い、痛い」と言っていたら、ハリ（のちのスワーミー・トゥリヤーナンダ）が「あなたの外はそうでも、中は至福の状態です」と言いました。それを聞いたシュリー・ラーマクリシュナは「お前にはわかるまい」と一見怒ったようでしたが、シュリー・ラーマクリシュナのハリに対するコメントは、「The rascal has found me out.」（やつは私を理解した）でした。これが「中は至福の喜び」の一例です。

また、『福音』や聖典には、クンダリニーの上昇過程の描写もあります。たとえば、くねくねとジグザグに進む「ヘビ」の例え、下の枝から上の枝に飛んで上がる「鳥」の例え、ゆっくり進む「アリ」、スッスッと泳ぐ「魚」、ひとっ跳びする「サル」、ジャンプしては休みジャンプしては休む「カエル」、などの説明があります。［👉『ラーマクリシュナの福音』2014年版　898頁、1044頁］

**サマーディの条件**

シュリー・ラーマクリシュナは、「サマーディには、世俗的な意識がほんの少しでも残っていたら入れない」と言いました。（実際はヴィシャヤ・ブッディ（世俗的な意識）という短い1つの言葉で言いました）

世俗的な思考、世俗的な波動、世俗的な状態、別の言葉で言えば、身体意識、生命エネルギー意識、感覚意識、心意識etc.を全て取り除かないと、サマーディには入れないのです。ヤマ・ニヤマの実践、シャマ・ダマの実践、つまり心のレベルや感覚のレベルでの訓練は、「世俗的な状態すべてを取り除くため」、「完全に純粋になるため」、「神すなわち永遠について集中して考えるため」におこないます。

『福音』の中に、客人がシュリー・ラーマクリシュナに「私にサマーディを教えてください」と乞う場面がありますが、人にヨーガ・アーサナを教えることはできても、サマーディを教えることはできません。ヨーガ・アーサナは数回あれば学ぶことができますが、サマーディは、身体、心、感覚、知性、魂のレベルで、深く、長い期間の準備（ヤマ・ニヤマ、シャマ・ダマなど）が必要だからです。「教わったらすぐに私はサマーディに入れる」と思っている人がいますが、サマーディはその類のものではありません。シュリー・ラーマクリシュナも「それは教えることではありません」と答えました。

ですが目の前の人がサマーディに入っていて、自分が入ることができなければ、「サマーディに入ったあとの経験を知りたい」という興味がわくことでしょう。自分が行ったことのない場所を旅してきた人に、興味津々になってその経験を聞くように、サマーディについて尋ねたいと思うでしょう。

またシュリー・ラーマクリシュナ自身も、若い直弟子たちに自分の霊的経験をシェアしたいと思いました。なぜなら直弟子たちは、のちに人びとを教える先生になるからです。それに人は自分の愛する人に全てをシェアしたいと思うものでしょう？　非利己的で純粋な愛から、シュリー・ラーマクリシュナも自分の全ての経験をシェアしたいと思いました。

しかし、スワーミー・サーラダーナンダ（この方もサマーディの経験をしました）が書いた『ラーマクリシュナの生涯』にあるように、シュリー・ラーマクリシュナが「サマーディ」について話そうとすると、カーリー女神に舌をおさええつけられ、話すことができませんでした。それでもシュリー・ラーマクリシュナは、私たちのために、愛をもって不可能のものを可能になさろうとしたのでした。

話は感覚と知性のレベルで行われるものです。他方、サマーディとは超越状態、つまり身体、感覚、心、知性を超越して体験するものです。ですからサマーディの様子を、感覚と知性のレベルを使って伝えることは矛盾ですし、不可能です。また、もしサマーディについて話したいならサマーディの状態に入らないとなりませんが、サマーディの超越状態で、感覚と知性のレベルを使って話すことは矛盾ですし、不可能です。

（板書）

Swa-samvedya

Para-samvedya

パラ・サンヴェッディヤとは、他人にも理解できる経験のことです──たとえば急に寒さを感じて毛布をかぶりました。それを見た他人は「寒いんだな」と理解できます。また暑くて扇風機を回しました。それを見た他人は「暑いんだな」とわかります──その種類の経験です。

スワ・サンヴェッデャは自分の経験という意味で、たとえば母親の子供への愛や、あるものの味わいは、それがどのようなものかを他人に一生懸命説明しても、（自分と神だけは理解できていますが）他人に完全に正しく理解してもらうことはできません。そしてサマーディはその類の、一番最高の例なのです。つまり、「たいへんに素晴らしい」と言うことしか、できません。それでもシュリー・ラーマクリシュナは、非利己的な純粋な愛をもって、私たちのためにサマーディに入ったあとの経験をシェアしたかったのですが、できませんでした。

**サチダーナンダ（サット・チット・アーナンダ）とサマーディ**

本文に戻ります。

（４３頁上段 最後の行）「サチダーナンダの自覚と同時に（＝サチダーナンダを悟ると同時に）人はサマーディに入る」とありますが、それは「サマーディに入るとサチダーナンダを悟る」と同じことです。どちらも正しい表現です。

サチダーナンダとはサット、チット、アーナンダ（＝絶対の存在、絶対の知識、絶対の至福）、別の言葉で、アートマン、パラマートマン、ブラフマン、イーシュワラ、バガヴァーン、ゴッド、神です。

「サチダーナンダを悟る」という意味は、「自分の状態がサチダーナンダの状態になる。自分がサチダーナンダになる」ということです。アートマンを悟ると自分がアートマンになる、ブラフマンを悟ると自分がブラフマンになるというのと同じです。またブラフマン、アートマンの本性はサチダーナンダですから、サマーディの結果は「自分がサット・チット・アーナンダになる」、つまり「絶対の存在、絶対の知識、絶対の至福になる」ということです。

**サチダーナンダと人生の目的**

それが人生の目的です。サマーディが人生の目的、サチダーナンダを悟ることが人生の目的、自分の本性を悟るのが人生の目的です。

ではなぜそれが人生の目的なのですか？

私たちの生来の願いは、知識が欲しい（＝すべてを知りたい）、存在が欲しい（＝永遠に生きたい）、喜びが欲しい（＝すべてを完全に喜び楽しみたい）です。私たちは本来的にそれを満たしたいわけですが、普通の方法では得られません。普通の知識、存在、喜びには限度があり、永遠でも完全でもないからです。しかしたったひとつ、サマーディの経験だけはその願いを満たすことができるのです。なぜならサマーディに入ると、絶対の存在、絶対の知識、絶対の至福（＝サチダーナンダ）を得るからです──これが「なぜサチダーナンダを悟ることが人生の目的なのか」の結論です。シュリー・ラーマクリシュナはいつも言っています。バガヴァーン　ラブ、神を悟ることが人生の目的であると。

**サマーディから戻ることはできるのか**

次に、「サマーディ（最高の、ニルヴィカルパ・サマーディのことです）から戻ることはできるのか」の問いについてです。これは「サマーディに入ったあとも、カルマの法則は適用されるのか。輪廻転生は続くのか」という問いでもあります。

　＊サンチター・カルマ……前生（複数）で積み重ねられてきたカルマのストック。今生はその一部からできている。

　＊プラーラブダ・カルマ……サンチター・カルマの一部からなる、すでに決められた今生のカルマ。

　＊クリヤマーナ・カルマ……今生なされる新たなカルマ。

答えは、「サマーディに入ったあとは、全てのカルマが取り除かれる」です。なぜなら、サンチター・カルマが影響するのは「からだ」［＝肉体・感覚・心・知性・記憶・生命エネルギー・自我のからだ］であって、魂には影響しないからです。つまり「自分は魂」だと悟った人にはサンチター・カルマの影響はないのです。たとえば今生の病気、苦しみ、悲しみは、サンチター・カルマの結果でそうなった可能性がありますが、サマーディに入ったあとは自分が「からだ」と同化していないので、その影響はなくなります。

またクリヤマーナ・カルマによって輪廻転生が続く可能性がありますが、サマーディに入ったあとはそれもなくなります。なぜなら全てのカルマが「焼き尽くされた種」となるからです。焼いた種を植えても芽は出ないように、カルマがあっても輪廻しません。輪廻しないので解脱します。

では、サマーディから戻ることはあるのでしょうか、それとも戻らないのでしょうか？

サマーディのあと21日間生きていて、その後、枯れ葉が落ちるように「からだ」が枯れ落ちるという意見があります。「Maha Mrityunjaya Mantra」の「Urvarukamiva bandhanan-mrityormukshiya mamritat」という節中に「熟した果物が落ちる」とありますが、そのように、なくなります。［👉日本ヴェーダーンタ協会CD『シヴァ神のマハームリットゥンジャヤ・マントラ』］

そして1つの意見が、ニルヴィカルパ・サマーディに入ってブラフマンの魂と自分の魂がひとつになったら、からだ意識に戻ることはない、というものです。それは塩で作った塩人形にたとえられ、こう説明されます──「塩人形が海の深さを測ろうとして海に入ったが、海に溶け込んで二度と戻ることはなかった」。いちどブラフマンに溶け込んだ者が、どのようにからだのレベルに戻ってくるというのか、戻ってくるという主張は非論理的だ、というものです。

ですがシュリー・ラーマクリシュナは「もちろん戻ってこられる」という別の意見でした。シャンカラーチャーリヤやシュカ・デーヴァはニルヴィカルパ・サマーディに入って戻ってきた方たちです。非論理的であっても実例があるのです。そして実例があるので、絶対に戻ってくることはできます。

しかし「どのように戻ってくるのか」の説明は難しいですし、本当のところ、その説明はできません。それを説明しようとするならば、自分の意志ではなく神のご意思で戻ってくると言えるだけ、神がそのように願ったらそれが実現すると言えるだけです。神は自分のための利己的目的ではなく、「人々に教える」という非利己的な目的（人々に教えることが神のお仕事です）を成就させるために、そうなさいます。それは人間にはできないし、説明もできませんが、しかし全知全能遍在の神の意識ではすべてが可能です。ですから「神には無理だ」ということは矛盾であり、「戻ってくる」という意見が論理的に成立するのです。

ただ、戻ってくるプロセスについては「神のみぞ知る」ことであり、神はそれをシェアしてはくれません。神ご自身には「神がどのように人間の形であらわれるか」、「無限からどのように有限になって人間の形（神の化身）としてあらわれるか」をご存知でも、私たちには知ることも説明もできないのです。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダも、「無限であられる神がどのようにして人間の形（アヴァターラ、化身）としてあらわれるのか、それを説明することはできない。しかしその実例はある」と言っています。つまりスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ自身がサマーディから戻ってきた方だからです──スワーミー・ヴィヴェーカーナンダも戻りました。シャンカラーチャーリヤも戻りました。シュカ・デーヴァも戻りました。しかし神から仕事の依頼がなければ、「熟した果物」のように落ちるのです。

以上、サマーディについて、『ラーマクリシュナの福音』のさまざまな説明を中心に、まとめて説明しました。『福音』には何回もサマーディのことが出てきますが（数えたら少なくとも40回はありました）、今日の内容を覚えておけば、毎回同じ話をしなくてもよいし、聞かなくてもよくなります。ですから今日の話をよく理解し、よく覚えておいてください。

**（賛歌奉献）**（映像データの１：５４：３０頃）

「アパレパデ　プラーンショーペーチ　アミ　アパーレパデ　プラーンショーペーチ」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上